東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

マレー半島における学校のICT化と伝統文化の継承

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡,康裕 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173775

マレー半島における学校のICT化と伝統文化の継承

前在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校　教諭
東京都大田区立西六郷小学校　主任教諭　吉　岡　康　裕

キーワード：グローバル化、生きる力、ICT、学校訪問、伝統文化

１．はじめに

昨今、世界情勢は変化が激しく、もはや国と国というより、地球規模で課題を見付け、課題を解決するために主体的に考えて行動していかなくてはならない時代に突入している。まさに、グローバル化する社会に適応できる「生きる力」が今後重要になってきている。日本の大学に国費留学したマレーシア人の学生が理念として「地球上で暮らす人は皆家族」という考え方があると話してくれた。赴任させていただいたJSKL（クアラルンプール日本人学校）で日々の生活を送ってきた中、急速に発展し続けているマレーシアの学校の伝統文化の継承とICT化について、特に「グローバル化、生きる力、ICT」という言葉をキーワードとして、体験したこと感じたことを還元するために紹介したい。

２．JSKL（クアラルンプール日本人学校）について

JSKLは、平成28年に50周年を迎えた。平成29年度には日馬国交樹立60周年記念を迎え当時の皇太子殿下（現、令和天皇）が入学式に御来校された。平成30年度にはマハティール氏が世界最年長でマレーシアの首相に選出され、「目標を達成するために努力する姿勢、成功に向かう価値観等を日本人から見習うべきだ」とのことにより、世界で注目される学校となっている。

JSKLの学校教育目標は、「たくましいからだ、ゆたかな心、優れた知性と国際性を備えた児童生徒の育成」である。小学部は約550名、中学部は約150名、幼稚部は約100名の計800名の大規模校で、情報課と研究課が主体的になって近隣の学校のICT事情を鑑み、校務の情報化、情報化の推進体制の基礎の構築、教科指導におけるICT活用、情報教育に取り組んできた。校内システムの構築については管理職の先生方はもちろんのこと、ICTのスペシャリストと協議しながら改善を図ってきた。また、研究課として教科指導におけるICT活用は鳥取県から派遣の中村仁教諭を中心に授業研究を進めてきた。教科指導ではICT活用した一斉学習、協働学習、個別学習においてiPadを活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践を行い、質の高い学習課題や教材提示をすることで、国際社会の中で生きる力となる思考力・判断力・表現力を養うために試行錯誤しながら、引き続き現在も派遣中のメンバーで取り組んでいる。また、同時に日本文化を大切にするために、日本文化資料室等を活用し、現地校と国際交流し、マレーシア人へ日本語教室を実施してきた。

ICTを使った国際理解教育の実践

３．マレー半島の現地校訪問

マレー半島の都市部と地方の学校を訪問した。都市部ではインターナショナル校・国立学校・私立学校を訪問、地方部では国立学校、そして近隣の日本人学校の計８校を訪問した。

(1) 2016年度…スンガイペンチャラ校（都市部国立学校）
　　カンチョンダラ校（地方国立学校）
　　サンウェイ（インターナショナル校）
　　ペナン日本人学校
(2) 2017年度…バングリス校（地方国立学校）
(3) 2018年度…スリベスタリ校（都市部私立学校）
　　アラムシャー校（都市部私立学校）
　　シンガポール日本人学校

バティック色染め体験

① 地方の学校視察は、ALEPS（Alumni Look East Policy Society：マレーシア東方政策元日本留学生同窓会）の協力を得てマレー系の国立学校を訪問した。鹿児島県から派遣の松﨑裕也教諭を中心に現地校の訪問を実施した。JSKLからは、折り紙を教えたり、ソーラン節や日本のラジオ体操を披露したりして交流した。また、マレーシアの文化に触れるために、伝統的なダンス、マレーゴマ、セパタクロー、椰子の実ボウリング、缶くずしゲーム等を教えてもらったり、模擬結婚式を披露していただいたり、バティックの色染めをしたり、共に生活させていただくという体験をした。さらに、バングリス校では体験学習として、ゴム採取、パーム椰子採取体験、コーヒーの実採取とつぶし体験を実施した。現地の伝統や文化、習慣、考え方、思いやりや協力の心を学んだ。

② 都市部の学校では、ICT教育が進んでいる学校が多かった。特に、サンウェイ校、シンガポール日本人学校、アラムシャー校では、教職員だけでなく子どもたち一人ひとりが積極的に毎時間の授業でPCを使用している様子があった。Google系のアプリケーションソフトを使った学習支援をしている学校が多いことが分かった。ICTを使った教育が進んでいることを日本同様に体感できた。また、各学校図書館が充実しており、蔵書の管理がなされていた。日本の生活科・総合的な学習の時間にあたる教科等があり、植物の栽培やリサイクル活動が印象的であった。リオデジャネイロオリンピック直後に訪問したこともあり、各クラスがICTを使ってオリンピック参加国についてそれぞれ調べ学習した内容が教室に掲示されていた。

また、サンウェイ校訪問では、カナダのオンタリオの教育カリキュラムをもとに教育を進めており、JSKLの生徒が卒業後サンウェイ校に進学することが多いことも分かった。大学までの一貫した教育カリキュラムを組んでおり、立派な寮が完備されていた。授業は、１人１台のPCを使って行われる社会科の授業や反転学習の授業が実施されていた。宿題などはSNSなどを使って情報が共有されていることが分かった。保健室登校している生徒のケアなども充実していた。

③　日本人学校訪問について、まず、シンガポール日本人学校訪問では、ICT 授業が充実していた。中学部では、生徒と先生は、メールで繋がっており、Googleのクラスルームというアプリケーションを使い、まとめや感想を生徒が先生へメールで送る形式で日々の授業が進められていた。また、生徒の課題提出率、正答率等をすぐに統計をとって視覚的に分かりやすいようにして業務が処理されていた。

Kahoot（ソフト）を使った英語の授業に取り組んでおり、教科書のある単元の復習では 4 択の質問が出てきて、子どもたちがそれぞれの問題の答えをタッチパネルで回答している様子があった。その解答数が瞬時に先生のPCで集計され全体の画面に映し出されていた。すべての回答の累計も画面に出てきた。生徒は、興味津々熱心に授業を受けている様子があった。

社会科の電力事情についての授業では、原子力発電、火力発電、太陽光発電、風力発電などのメリット、デメリットを班で話し合い、即座にスプレッドシートにそれぞれ考えたことを共有ファイルに書き込む授業を実施していた。

小学 4 年生の社会科消防設備の授業では、担任が作ったテンプレートを使って学校の安全を守る消防施設を見つけ、新聞にまとめていたり、ワークシートをまとめていた。小学 4 年生も 1 人 1 台のPCを使って授業を行っていた。キーボードのローマ字入力で文字を打ち込んでいた。新聞を作る際に、表題のフォントの大きさ、色を自分で変更し、ワークシートにテンプレートで入っていた校内図に消火器の場所に色を付けて分かりやすいようにしていた。授業が終わったら専用のPCラックにしまい、充電していた。

ペナン日本人学校では、校内の研究・研修等取り組みでは、各教科、道徳、総合的な学習の時間に地域資料を取り入れた現地理解・国際理解教育を進めていることが分かった。JSKL 同様に地域のことを教材にした授業を計画的に実施することにより、児童生徒の現地理解、国際理解を深める学習を行っていた。実地調査、実地見学を行い、地域の教材開発に力を入れていた。日系企業が東南アジアに進出した理由、日本とマレーシアとの経済面での結びつきや、ペナンの観光産業の強みを知ることで、ペナンの地域的特色の理解を深める研究を実施していた。

アラムシャー校では、全寮制の優秀な生徒が集まる男子校で、日本語の授業を見学した。生徒は語学を選択できて、日本語だけでなく、中国語、韓国語、アラビア語、スペイン語の語学クラスがあった。選択の語学の中で一番人気があるのは日本語のクラスであるとのことであった。中学 1 年生から 5 年生までの 5 年間で日本語の読み書きがある程度できるようになると聞いた。音声機器、プロジェクター等を使い、授業でICT 教育をしている様子が分かった。

都市部・地方・日本人学校のいずれの学校もICT 教育に力を入れていることが分かった。その中でも、都市部の学校では、ICT 教育が特に進んでおり、サンウェイ校、シンガポール日本人学校、アラムシャー校では、PCを教職員だけでなく、子どもたち一人ひとりが積極的に毎時間の授業でPCを使用している様子があった。ますます、ICTを使った教育が盛んになっていくことを体感することができた。

4．まとめ

ルックイースト政策が未だに根強く残っていて日本に対する尊敬のまなざしがあることを確認することができた。今後も日本を見習って社会を発展させていきたいと願っているマレーシア人が多くいることがマレー半島の学校を訪問することで分かった。日本は、個々人の技術力が高く、それが、国の発展につながってきていることを現地の方々の中から幾度となく聞く機会があり、その言葉は日本人への今後の期待も込められていたように感じた。

そのため、マレーシアの学校には、伝統文化を大切にし、技術を進歩させたいという思いが教育活動の中に多々見られた。

グローバルな視野をもちながら現地の理解を深めることは、児童生徒が「主体的・対話的で深い学び」ができる教育環境づくりにつながると考えている。

また、児童生徒を中心に考えて、学校・保護者・地域が一体となって、近未来の教育環境をつくり上げていくことが急務であることを感じた。

そして、国際社会に生きる日本人としての「生きる力」を身に付けるために「ICT 環境の充実」が必要不可欠であることが分かった。

今後、AI 技術の進化により、ICT 環境を充実させる活動はさらに変化をしながら続くと考えられる。児童生徒が前向きに「生きる力」をもって取り組める環境をつくっていくことは、変化の激しい国際社会を生き抜く力になると考えている。

日本とマレーシアは、これからも草の根レベルで温かい心の交流を続けていくことで互いの国の発展につながると感じた。また、心の距離を縮めたいという思いは、世界中のどこの国の人たちと交流をする上でも大切であると考えることができた。

教育者として、地球規模で子どもの教育について考えることができ、海外から見た日本について考えることができた 3 年間であった。

今後も、子どもたちや教育関係者の方々に、グローバル化社会に生きる人材の育成について語り、世界文化の進展に寄与できる人材の育成に取り組んでいきたい。